

——特集にあたって——

筆者らが『医療薬学』誌に投稿した論文で「DPIの吸入指導にはテスターを使用すること」「吸入薬を使用する前にデバイスの適性を判断すること」の有用性を示したのは2008年でした。今では、喘息や慢性閉塞性肺疾患（COPD）のガイドラインにも記載される項目になりましたが、当時は日本のガイドラインや論文などでこれらの内容が明確に示されたものは見つけられず、そもそも適切な吸入指導という概念も希薄な状況でした。それだけ、吸入療法に対して取り組むべき課題があったのです。すでに論文掲載から約15年が経ちますが、この間に使用される吸入薬のデバイスは大幅に増え、薬剤師による吸入指導の重要性は高まっています。また、2020年4月には吸入薬指導加算が新設され、吸入指導に対する薬剤師の業務が保険点数の面からも評価されるようになりました。

しかし、薬剤師による吸入指導関連の論文を検索してみると2008～2022年の間に『日本病院薬剤師会雑誌』6報、『医療薬学』誌6報、その他の学会誌でも数報であり、学会発表数も決して多くはありません。吸入療法は薬剤師の力が治療効果を左右する分野でありながら新たな報告が少ないのが現状です。これは、吸入薬の使い方や注意点を製薬会社が動画で掲載したり、医師や薬剤師がYouTubeなどの動画配信サービスで解説するなど、情報が溢れているために検証すべき課題を見つけにくく

なっているからかもしれません。

一方で、本誌の姉妹誌である『Rp.+レシピプラス』2018年冬号「気管支喘息・COPDの吸入剤」は重要な情報がコンパクトにまとまった良書ということもあり、発刊から4年経った現在でも継続して多くの方に購入されています。このことから、論文や発表数が減ったからといって吸入療法に対する薬剤師の意識が低くなっているわけではなく、多くの先生方がしっかり学びたいという意識をもっていることがうかがえます。

本特集では、吸入療法について学びたいと考えている先生方が臨床で感じると思われる疑問や、一段階上の吸入指導を行うために知っていただきたい内容を取り上げています。吸入薬の使用法の説明は動画を見れば簡単にできますが、吸入療法の本質を理解し、治療効果の向上につながる一歩踏み込んだ吸入指導は決して簡単ではありません。「本気ではじめる！吸入指導」のために本特集をご活用いただき、「本気で取り組んだからこそ見えてくる問題点」を解決するために多くの施設から新たなエビデンスが発信されることを心から願っています。

名古屋セントラル病院 薬剤科 副薬剤長

坂野 昌志